

創立150年記念特集

チベット仏教の美術

皇帝も愛した神秘の美

Mystical Beauty

Tibetan Buddhist Art from the Museum Collection

2022年7月26日(火)～9月19日(月)

東京国立博物館 平成館 企画展示室



7世紀ごろ、ヒマラヤ山脈の北側に広がるチベットにインドから仏教が伝えられました。以来、インド仏教を忠実に継承しながらも独自の発展をみせ、今日に至るまで洗練された仏教文化が栄えてきました。チベット仏教は、高度な仏教思想や神秘的な儀礼で知られ、儀礼で用いる数多くの仏像や仏画、特色ある法具が伝わっています。モンゴルや中国など周辺地域でもチベット仏教が広く信仰され、清時代の歴代皇帝、とりわけその最盛期を築いた乾隆帝(在位1735～95)が傾倒したことはよく知られています。北京やその周辺には、現地から多数の僧侶や職人が招かれ、本格的なチベット仏教寺院が建立されました。

日本との直接的な交流は近代までありませんが、日本人として初めてチベットを訪れた僧河口慧海(1866～1945)の旅行記を契機としてチベット仏教が注目されるようになります。東京国立博物館(以下、当館)でも、創立以降さまざまな機会にチベットに関連した資料を収集してきました。この特集では、なかでも絵画・彫刻・工芸・書跡の各分野を代表する優品を、慧海のご遺族からの寄贈品の一部とともに紹介します。当館のチベット仏教関係資料をまとめてご紹介するのは、1999年の東洋館開館30周年記念特集「河口慧海将來品とラマ教美術」以来、約20年ぶりです。ぜひこの機会にチベット仏教の美術に親しんでいただければ幸いです。

After Buddhism arrived in Tibet in the 7th century, a unique Buddhist culture flourished there, with Tibetan Buddhism later influencing neighboring regions like Mongolia and China. For the first time in 20 years, this exhibition displays some of the finest paintings, sculptures, decorative arts, and calligraphic works from Tokyo National Museum's Tibetan collection alongside articles associated with the monk Kawaguchi Ekai (1866–1945), the first Japanese person to visit Tibet.

仏画

チベットでは、軸装された仏画のことを「タンカ」と呼びます。かつてインドにあったパタという布絵仏画を継承する数少ない絵画形式です。日本の軸装仏画と似ていますが、画布に木綿を用いることが多い点、表面に保護のための布をかける点などが異なります。曼荼羅 (No.1) のほか、仏や祖師 (No.2)、伝説上の人物などさまざまな礼拝対象が描かれました。



1 ガルバ・ヘーヴァジュラ十七尊曼荼羅
 (『ヴァジュラーヴァリー』曼荼羅集のうち14番)
 Hevajra Mandala, the Fourteenth Mandala of the *Vajrāvalī*
 綿本着色 中国 清時代・18世紀 TA-509

康熙帝 (在位 1661~1722) の第12皇子胤禩 (1686~1763) が作らせた全45種からなる曼荼羅セットのうち、2・9・14番の作品を所蔵しています。チベット仏教の曼荼羅は原則として円形に描くのが特徴で、円の外には風景などが配されます。



2 ツォンカパ伝
 Biography of Tsongkhapa
 綿本着色 中国 清時代・18~19世紀 TA-612

チベット仏教の最大宗派であるゲルク派の祖ツォンカパ (1357~1419) とその伝記。本幅は1380年代の事績が描かれ、複数作品で構成されたうちの一幅とみられます。チベット探検家の寺本婉雅 (1872~1940) が、古都ラサで収集しました。

仏像

チベット仏教でも主要な礼拝対象である仏像はさまざまな材質で製作されましたが、銅造に鍍金で仕上げた金銅仏 (No.3) が好まれました。インドや中国から伝えられた仏像を手本として造仏が始まり、モンゴルや中国でチベット製の仏像を忠実に写すことが流行します (No.4、5)。また、インドの女神信仰の影響を受け、妃を抱擁する父母仏 (ヤブユム、表紙中央) が信仰されるのも特徴の一つです。チベットでは、密教経典の本尊が妃と交わり、仏を生み出すと考えられました。



3 菩薩坐像
 Bodhisattva
 銅造、鍍金 中国・チベットまたはネパール
 15~16世紀 TC-1



4 除蓋障菩薩坐像 (八大菩薩のうち)
 Sarvanivaraṇaviskambhin, One of the Eight Great Bodhisattvas
 銅造、鍍金 中国 清時代・18世紀 TC-269

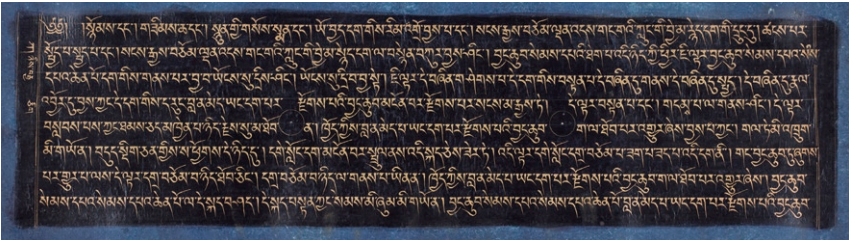


5 無量寿仏坐像
 The Buddha Amitayus
 銅造、鍍金 中国 明時代・宣徳年間 (1426~35) TC-62

チベット仏教を受容した中国では、宮廷の官営工房でも仏像が製作されました。No.5は鑄造像に、乾漆製の光背と台座を完備した明時代の貴重な遺品です。No.4は清時代の乾隆帝が造らせたものです。

法具

仏事に用いられる法具にはさまざまな種類がありますが、金剛杵（表紙左上）や金剛鈴（No.9）は僧侶の修行には欠かせず、特異な造形で知られます。またインドの原典を忠実に翻訳した経典（No.6）もチベット仏教の特色であり、清時代には満洲語にも翻訳されました。ほかに僧俗を問わずお守りとして親しまれた、携帯用の厨子であるガウ（No.7）など、個性豊かな法具を紹介します。



6 般若経
Perfection of Wisdom Sutra
藍紙金泥 中国・チベットまたは中国内地
18世紀 桜井洋氏寄贈 TB-1468

藍色の料紙に、金泥を使いチベット文字で書かれた『般若経』の一部。左側には外題が記され、中央には孔を開けるスペースがあります。本来はこれに紐を貫通させて重ね、経板と呼ばれる板で上下を挟んで収蔵しました。



7 ガウ 携帯厨子
Portable Shrine
銅製、鍍金 中国 清時代・18～19世紀 TH-249

左右の環に紐を通し、腹や背に装着してお守りとして携帯するものです。蓋表面にあるのはカーラチャクラという仏を表わす7字の種子を合成した意匠「ナムチュワンデン」です。内部の仏像は現在、失われています。



8 盤 白色如意宝珠マハーカーラ
Plaque with the White Protective Deity Mahākāla Holding a Wish-Granting Jewel
磁製 中国・景德鎮窯 明時代・万暦年間（1573～1620）
横河民輔氏寄贈 TG-942

文様の輪郭を盛り土し、素地に複数の色釉を掛け分ける法花製の盤。延命長寿や繁栄をつかさどるマハーカーラを描き、裏面には「大明万暦年製」銘があります。



9 九鉤鈴
Bell with a Nine-Pronged Vajra
銅製、鍍金
中国 明時代・宣徳年間
（1426～35）
TE-230

鈴のように鳴らして仏を供養する法具です。鉤と呼ばれる切っ先が9本と多く、束に人面が表わされているのが特徴です。鈴身の内側に「大明宣徳年施」と陽鑄し、チベットからの朝貢使節に与えられた返礼品と思われます。

仏塔

ブッダの没後、その遺骨である仏舎利や、これを納めた墳墓である仏塔（ストゥーパ）に對する信仰がインドで起こり、アジア各地へ広まりました。チベット仏教では「チューテン」と呼ばれ、塔内には仏像や仏画、仏舎利などが納められました。



10
チベット式仏塔
Tibetan-Style Pagoda
銅製、鍍金
中国 清時代・18～19世紀
TE-736



11
チベット式仏塔
Tibetan-Style Pagoda
磁製 中国 清時代・19世紀
横河民輔氏寄贈 TG-1029

東アジアの仏塔は、五重塔など層塔型の建築形式が一般的ですが、チベットの仏塔は墳丘を表わす半球状の伏鉢部分（ふくはち）が大きい、インド的なスタイルです（No.10、11）。その形式はさらに8種類に分類でき、インドの著名な仏跡にあった八大仏塔が手本と伝わります。中国では乾隆年間以降に磁製の仏塔も盛んに製作されました。

中国歴代皇帝とチベット仏教

元時代のクビライ（在位1260～94）らモンゴル王侯による信仰が契機となり、中国本土にチベット仏教が普及しました。明時代に入ると、「大明宣徳年施」銘をもつ無量寿仏坐像（No.5）など、銘文から明らかに中国内地製と判断できる遺品が増加します。ただし、その多くが、皇帝に貢物を献上するためにチベットから派遣されてきた朝貢使節への返礼品でした。また、モンゴルや満洲系の皇帝はしばしば自らチベット仏教を信奉しました。清時代に乾隆帝が北京周辺の8か所に建立した六品仏像はその集大成といえ、「大清乾隆年敬造」と明記された数多くの仏像（No.4）が奉安されたのです。



No.5 部分



No.4 部分

河口慧海の収集品

19世紀当時、鎖国状態にあったチベットに、日本人として初めて訪れたのは現在の大阪・堺市出身の僧河口慧海 (No.12参照) です。チベット語の経典を求めて二度にわたりチベットへ入り、道中のインドやネパールで得たものを含め、数多くの文物を持ち帰りました。帰国後、同郷の正木直彦 (1862～1940) が校長を務めた東京美術学校 (現 東京藝術大学) で展示会が開催され、多くの人に驚きを与えました。その遺品の大半は東北大学に寄贈され、昭和48年 (1973) に当館にも一部が寄贈されました。



13 河口慧海請来風俗資料

Objects Brought to Japan by Kawaguchi Ekai

チベット、ネパール、インド 19～20世紀
宮田恵美氏・上原スミ氏・水谷マサ氏寄贈
TJ-4834-11

チベットから持ち帰った、当時現地で使用されていた女性用の装飾品や硬貨、鉢物、法具類を、慧海自ら3箱に整理した資料です。1回目のチベット旅行帰国後に東京美術学校で開催した展示会の図録『河口慧海師将来西藏品図録』画報社、1904年)の写真から、当時すでに現在の形に整理されていたことがわかります。



12 入蔵沙門 (河口慧海立像)

A Monk Entering Tibet (Kawaguchi Ekai)

藤岡光田作 木造 昭和10年 (1935)
宮田恵美氏・上原スミ氏・水谷マサ氏寄贈
P-2969

台座背面に「昭和十年四月光田謹写」と刻まれており、昭和11年の改組第1回帝展に出品された作品 (東洋文庫所蔵) の試作であることがわかります。



14 釈迦如来坐像

The Buddha Śākyamuni

銅造、鍍金、金泥塗 中国・チベットまたは中国内地 18～19世紀
宮田恵美氏・上原スミ氏・水谷マサ氏寄贈
TJ-4834-5



15 二臂マハーカーラ立像

The Protective Deity Mahākāla

銅造 ネパール 19～20世紀
宮田恵美氏・上原スミ氏・水谷マサ氏寄贈 TJ-4834-10



16 釈迦三尊像

The Buddha Śākyamuni with Two Attendants

石造 インド パーラ朝・9世紀
宮田恵美氏・上原スミ氏・水谷マサ氏寄贈
TJ-4834-14



18 菩薩立像

Bodhisattva

木造、彩色 ネパール 14～15世紀
宮田恵美氏・上原スミ氏・水谷マサ氏寄贈
TJ-4834-1

1回目のチベット旅行時に、ネパールのボグナートで高僧から入手した仏像です。光背の背面に慧海の自筆で「明治三十八年六月□日雪山中子 (=ネ) パーリ/国迦葉波仏大塔ノ仏堂ニ安置セル□/全塔主 (ブッダバツザラ) 氏ヨリ受ク 慧海誌」と記されています。



17 檀木釈迦如来立像

The Buddha Śākyamuni

高村光雲作 木造 昭和3年 (1928)
宮田恵美氏・上原スミ氏・水谷マサ氏寄贈
P-2971

慧海が持ち帰った白檀材に、交流のあった高村光雲 (1852～1934) が仏像を彫刻しました。背面には「贈呈 河口慧海上人/高村光雲喜寿記念ノ為/釈尊ヲ奉彫/昭和三年中秋」と銘文が刻まれます。2回目の帰国後に東京美術学校で開催した展示会の図録『美術資料 西藏之部』美術工芸会、1917年)には、彫刻される前の白檀材の写真が掲載されています (右)。



(『河口慧海著作集 別巻2 西藏旅行絵巻・西藏品図録 美術資料・梵文法華経』うしお書店、2001年より)

【謝辞】 本特集においては、田中公明氏 (公益財団法人中村元東方研究所) に貴重なご助言を賜りました。記して感謝申し上げます。

【表紙】『秘密集会』阿閼金剛三十二尊曼荼羅 (TA-505)、チャクラサンヴァラ父母仏立像 (TC-192)、九結杵 (TE-952)、虎面母立像 (TC-332)、マカラ面母立像 (TC-333)、No.9

創立150年記念特集 チベット仏教の美術—皇帝も愛した神秘の美—

令和4年 (2022) 7月26日発行

執筆: 西木政統 展示企画: 西木政統、猪熊兼樹、植松瑞希 (以上、東京国立博物館)、三田寛之 (奈良国立博物館)、撮影: 藤瀬雄輔 (東京国立博物館)ほか、翻訳: ダニエル・モラン、ミウオシュ・ヴォズニ (東京国立博物館)、デザイン・制作・印刷: 精興社、編集・発行: 東京国立博物館

©2022 東京国立博物館 Tokyo National Museum